

目的 子供は家庭に生まれ、そして家庭を生活の中心の場として成長する。それゆえに、家庭を場として営まれる家庭教育は、すべての教育の基礎になる最も大切な教育であるといえる。本研究では、このような重要性を掲げている家庭教育について、そのあり方を考えるために、わが国における家庭教育の史的研究所を行なったのである。今回は江戸時代前期の儒者である伊藤仁斎の家庭教育論を考察することにした。

方法 本研究では、とくに伊藤仁斎の家庭教育論を分析するうえで重要と考えられる童子間やその他の著作と彼の教育思想に関する資料を中心に考察をした。

結果 仁斎の家庭教育論は、儒学における教育思想を基礎として構築されている。とくに学問と徳性の関係、仁の教育との関係、歴史と教育との関係、教育者としての人間論を踏まえて、展開されている。自らの家庭教育の実践においては、封建社会の枠組の中にとどまっていた。前近代的な家庭教育論ではあるが、意図的な家庭教育、家庭教育の方針の明確化、親としての子供に対するモデルのあり方を示した点が高く評価されるのである。仁斎の家庭教育論は、近代的な制約と思想的基礎との異質性を含みながらも、現代の民主主義社会の家庭教育において学ぶべき点を見出すことが出来るのである。